

古代語の条件表現(2) 既定条件等「已然形+バ」

——『萬葉集』を資料として——

中 島 悦 子

1. はじめに

中島（2004、前稿と呼ぶ）は、『萬葉集』を資料として、いわゆる条件の接続助詞「バ」のうちの「未然形+バ」を取り上げて分析し、次のような結論を得た。

- (1) 假定条件を表すものは、テンスのない「V 未然バ」が大半を占め、テンスの明示される完了假定「V タラバ」は2例のみの出現で未発達であった。代わって「ナバ」「テバ」が用いられた。
- (2) 「ナラバ」はその殆どが名詞に接続する「N ナラバ」の形で使われた。「ト ナラバ」「V モノ ナラバ」は各1例ずつあったが、補文に直接する「V ナラバ」は皆無であった。
- (3) 假定条件を表す「未然形+バ」は後件に推量・意志・命令・願望・様態等（「ム」「メ」「ベシ」「動詞命令形」等）のモダリティ形式をとる比率が高かった。また、反事実的假定条件を表す「未然形+バ」も後件に「マシ（モノ）（ヲ）」というモダリティ形式をとっている。つまり、現代語の「バ」と異なり、古代語における「未然形+バ」は後件にモダリティ制約を伴わないことが分かった。

本稿は前稿で取り上げた「未然形+バ」に続くものとして、「已然形+バ」を取り上げて検討する。資料は前稿と同じく、鎌倉末期書写の完本である西本願寺本を底本とする、補訂版『萬葉集』本文篇（塙書房 1963）および新編日本古典文学全集『萬葉集』（小学館 1996）を使用した。

前稿で中島が規定した条件表現の意味を、再度簡単に用例を挙げて説明する。

条件表現

①假定条件

- (a) 假定条件
- (b) 反事実的假定条件

②一般条件

③既定条件

- (a) 原因・理由的条件
- (b) 事実的条件
 - (i) 時間的狀況・近接的継起
 - (ii) きっかけ
 - (iii) 発見

- (1) 奈良山をにほはす黄葉手折り来て今夜かざしつ散らば(落者)散るとも 卷 8 1558
- (2) 妻もあらば(有者)摘みて食べまし沙弥の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや 卷 2 221
- (3) 父母を見れば(美礼婆)尊し妻子見れば(美礼婆)めぐし愛し世の中はかくぞ道理… 卷 5 800
- (4) 生ける者遂にも死ぬるものにあれば(有者)この世なる間は楽しくをあらな 卷 3 349
- (5) 住吉の里行きしかば(行之鹿齒)春花のいやめづらしき君に逢へるかも 卷10 1886
- (6) 石走る瀧もとどろに鳴く蟬の声をし聞けば(伎気婆)都し思ほゆ 卷15 3617
- (7) もの思ふと隠らひ居りて今日見れば(見者)春日の山は色付きにけり 卷10 2199

①の仮定条件のうち(a)の仮定条件とは、例(1)のように前件の未実現の事態を未来に実現するものと仮定し、後件の条件とするものである。(b)の反事実的仮定条件とは、例(2)のように事実と反対の事態を前件で仮定し、後件の条件とする、いわゆる反実仮想といわれるものである。②の一般条件とは、例(3)のように前件が起これば必ず後件が起こるものをいう。③の既定条件のうち、(a)原因・理由的条件とは、例(4)のように前件が後件の原因・理由になっているものである。(b)の事実的条件とは、前件と後件の既然の事実とを結びつけたもので、例(5)のように前件の事実と後件の事実とが時間的に同時あるいは継起的に起こるもの、例(6)のように前件の事実が後件の事実のきっかけとなっているもの、例(7)のように前件の事実が後件の事実を発見する条件となっているもの等をいう。以上のうち、①の仮定条件は「未然形+バ」によって表示され、②の一般条件と③の既定条件は「已然形+バ」によって表示される。

表1 『万葉集』の条件表現「未然形+バ」「已然形+バ」

	者	婆	波	齒	伐	薄	播	之	総計
未然形+バ									
①仮定条件	286	115	14	1	1	0	0	2	419
②反事実的仮定	31	26	6	0	3	0	0	0	66
未然バ総計	317	141	20	1	4	0	0	2	485
已然形+バ									
①既定・事実的	393	107	8	3	0	0	0	0	511
②既定・原因理由									
既定(1)順接バ	158	65	10	2	0	1	0	0	236
ネバ	42	10	3						55
既定(2)逆接ネバ	18	4	0	0	0	0	0	0	22
既定(1)(2)	218	79	13	2	0	1	0	0	313
③一般条件	36	36	6	0	0	1	1	1	81
已然バ総計	647	222	27	5	0	2	1	1	905
未然バ+已然バ	964	363	47	6	4	2	1	3	1390

『萬葉集』全20巻4516首から採取したいいわゆる条件の接続助詞「バ」（「未然形＋バ」「已然形＋バ」）の数値は前稿にも掲げたが、本稿でも再度表1に提示する。表1は、「者」「婆」「波」「齒」「伐」「薄」「播」「之」等の萬葉仮名で表記されている接続助詞「バ」を『萬葉集索引 古典索引刊行会編』（塙書房 2003）に従って採取し、萬葉仮名ごとにその数値を記したものである。

中島の採取した「バ」はその総数が1390例ある。そのうち「未然形＋バ」は485例、34.9%（総数1390例に対する比率）、「已然形＋バ」は905例、65.1%（対総数比）である。「已然形＋バ」905例中、一般条件を表すものは81例、5.8%（対総数比）、原因・理由的条件（順接ネバ、逆接ネバを含む）が313例、22.5%（対総数比）、事実的条件が511例、36.8%（対総数比）ある。いわゆる条件の接続助詞「バ」は「未然形＋バ」より「已然形＋バ」の方が多く、その中でも事実的条件が最多となっている。

2. 「已然形＋バ」による一般条件、理由・原因的条件、事実的条件

——「バ」の上接語による分類——

表2は「已然形＋バ」による条件表現を、形態的に「バ」の上接語によって「V 已然バ」「N ナレバ」「V タレバ」「A ケレバ」「ネバ」「トイヘバ」に分類し、一般条件、原因・理由的条件、事実的条件ごとにその数値を示したものである。

簡単に説明すると、動詞已然形に接続する「バ」を「V 已然バ」とする。「ナレバ」はいわゆる断定の助動詞「ナリ」の已然形「ナレ」に「バ」の承接したものであり、「ナレバ」が名詞についた形を「N ナレバ」とする。なお、補文に直接する「V ナレバ」はまだ出現していない。「タレバ」はいわゆる完了の助動詞「タリ」の已然形「タレ」に「バ」のついたもので、動詞に接続する形を「V タレバ」とする。形容詞の已然形に接続する「バ」を「A ケレバ」とする。「ネバ」は打消の助動詞「ズ」の已然形「ネ」に「バ」のついた形式である。「トイヘバ」は話題を提示するいわゆる提題としての形式である。

表2によると、「V 已然バ」は「已然形＋バ」総数905例中786例あり、その内訳は一般条件81例中81例全てに、原因・理由的条件では313例中211例に、事実的条件では511例中494例に用いられて

表2 「已然形＋バ」による一般条件、原因・理由的条件、事実的条件——「バ」の上接語による分類——

	一般条件	原因・理由的条件	事実的条件	計
V 已然バ	81	211	494	786
N ナレバ		17	1	18
V タレバ		1	1	2
A ケレバ		11		11
ネバ①順接		55	8	63
ネバ②逆接		18		18
トイヘバ			7	7
計	81	313	511	905

いる。「V 已然バ」は一般条件，原因・理由的条件，事実的条件を表す典型的・基本的な形式であることがわかる。

「N ナレバ」18例は原因・理由的条件に17例，事実的条件に1例ある。「N ナレバ」は本来，基本的には原因・理由的条件を表していたことがわかる。「N ナレバ」の原因・理由用法は古代語に限らない。例えば，中世末期から近世初期にかけての言語変化が知られる『捷解新語』を見ると，「N ナレバ」は初刊本に7例，改修本に7例，重刊本に4例あり，全てみな理由を表すものとなっている（奥津・中島1990b）。また，近世中期から末期にかけての言語が知られる『浮世床』においても「N ナレバ」5例はすべて理由を表す。『浮世床』には「V ナレバ」の非常に特殊な形が1例あるが，これも理由を表す（中島1990b）。「V タレバ」は原因・理由的条件に1例，事実的条件に1例と計2例しかなく，古代語においてはこの形式は未だ発達していなかったことがうかがわれる。なお，『捷解新語』には「V タレバ」が初刊本8例，改修本6例，重刊本3例あり，事実的条件の継起表現や理由表現を表すものとなっている。また『浮世床』には9例あり，8例が事実的条件の継起表現で，理由を表すのは1例だけである。小林賢次（1996）によると，狂言台本『大蔵虎明本』（1642書写）では，「N ナレバ」88例中69例（78%）が必然確定条件（原因・理由的条件を意味する）に，「V タレバ」197例中174例（88%）が偶然確定条件（事実的条件を意味する）に使われているとある。

「ネバ」は原因・理由的条件として順接（～ノデ）を表すものに55例，逆接（～ノニ）を表すものに18例，計73例あるが，事実的条件には8例しかない。「ネバ」は典型的・基本的には原因・理由的条件を表していたと考えられる。

「A ケレバ」は11例すべて原因・理由的条件にしか使われていない。なお，『捷解新語』では形容詞の已然形についた「バ」（「A ケレバ」）が假定条件の意味で使われている例（「あしければ」「わるければ」）がある（奥津・中島1990b）。

「トイヘバ」は7例あり，この「バ」は文の主題を提示する，いわゆる提題的用法に使われている。

以上から，「V 已然バ」は一般条件，原因・理由的条件，事実的条件すべてに使われており，特に事実的条件に多用されていること，「N ナレバ」「ネバ」「A ケレバ」は原因・理由的条件を基本用法としており，事実的条件には殆ど使われていないこと，「V タレバ」は2例しかないが原因・理由的条件と事実的条件に使用されたこと，「トイヘバ」形式の使用によって「バ」が条件用法から提題用法へと広がりを見せていること等が指摘できる。

表3は一般条件，原因・理由的条件，事実的条件ごとの「バ」の上接語による分類の数値を萬葉仮名それぞれについて示したものである。この表3に従って，以下の章で一般条件，原因・理由的条件，事実的条件について，「バ」の上接語による分類ごとに具体的に用例を挙げて検討する。用例の読み下し本文と口語訳は小学館の新編日本古典文学全集『萬葉集』に依拠した。

表3 一般条件, 原因・理由的条件, 事実的条件——萬葉仮名ごとの「バ」の上接語による分類——

形態+バ	者	婆	波	齒	薄	播	之	計
①一般条件								
(1)V 已然バ	36	36	6		1	1	1	81
②既定・理由的条件	218	79	13	2	1			313
(1)V 已然バ	140	54	10	2	1			207
(3)N ナレバ	11	6						17
(4)V タレバ	1							1
(8)A ケレバ	6	5						11
(5)V ネバ①	42	10	3					55
(7)V ネバ② (逆接)	16	2						18
(8)V 已然バ (逆接)	2	2						4
③既定・事実的条件	393	107	8	3				511
(1)V 已然バ	383	101	7	3				494
(2)N ナレバ	1							1
(3)V タレバ	1							1
(5)ネバ	6	1	1					8
(4)トイヘバ	2	5						7
総 計	647	222	27	5	2	1	1	905

3. 「バ」の上接語による一般条件

一般条件とは「已然形+バ」で示される前件のもとでは後件が常に生ずるといった意味関係を表すものである。松下 (1928) の「現然仮定」, 阪倉 (1958) の「恒常確定」, 渡辺 (1974) の「一般条件」に当たる。

一般条件を表す「已然形+バ」は, 「者」36例, 「婆」36例, 「波」6例, 「薄」1例, 「播」1例, 「之」1例と計81例あり, 総数905に対する比率は8.9%とかなり低い。「バ」の上接語による分類では81例全てが動詞の已然形に接続する形式「V 已然バ」となっている。

3.1 「V 已然バ」による一般条件

- (8) 楽浪の連庫山に雲居れば (居者) 雨そ降るちふ歸り来我が背 卷7 1170
- (9) 古ゆ言ひ継ぎけらく恋すれば (恋為者) 苦しきものと玉の緒の継ぎては言へど… 卷13 3255
- (10) 父母を見れば (美礼婆) 尊し妻子見れば (美礼婆) めぐし愛し世の中はかくぞ理… 卷5 800
- (11) 心合へば (合者) 相寝るものを小山田の鹿猪田守のごと母し守らすも 卷12 3000
- (12) …か行けば (由既婆) 人に厭はえかく行けば (由既婆) 人に憎まえ老よし男はかくのみならし
… 卷5 804
- (13) 冬過ぎて春し来れば (来者) 年月は新たなれども人は古り行く 卷10 1884

- (14) 楊こそ伐れば(伎礼婆) 生えすれ世の人の恋に死なむをいかにせよとそ 巻14 3491
 (15) 常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば(比気波) 絶えすれあどか絶えせむ 巻14 3397
 (16) 夕されば(暮去者) 小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずい寝にけらしも 巻 8 1511
 (17) 瓜食めば(波米婆) 子ども思ほゆ栗食めば(波米婆) まして偲はゆ… 巻 5 802

例(8)「連庫山に雲居れば雨そ降るちふ」(連庫山に雲がかかると雨が降るといいます)のような雲によって天気を占うという習慣, 例(9)「古ゆ言ひ継ぎけらく恋すれば苦しきもの」(昔からの言い伝えには恋をすると苦しいものだ)という言い伝え, 例(10)「父母を見れば貴し妻子見ればめぐし愛し世の中はかくぞ理」(父母を見れば貴いし, 妻子を見ればいとしく可愛い, これが世間の道理である)という道理, 例(11)「心合へば相寝るものを」(愛する者は心さえ合へば必ず共に寝られるものだ)という諺等に示されるように, 一般条件を表す「バ」は前件と後件との間に時間を超越して成立する普遍的な関係を表すものを典型とする。

一般条件を表す「バ」はまた, 例(12)「か行けば人に厭はえかく行けば人に憎まえ老よし男はかくのみならし」(あちらに行けば人に嫌われ, こちらに行けば人に憎まれる老人とはこんなものらしい), 例(13)「冬過ぎて春し来れば年月は新たなれども」(冬が過ぎて春が来ると年月は新たである), 例(14)「楊こそ伐れば生えすれ」(楊ならば伐ればまた生える), 例(15)「玉藻こそ引けば絶えすれ」(玉藻なら引くと絶えようが)のように前件が起これば必ず後件が起こるという関係, さらに, 例(16)「夕されば小倉の山に鳴く鹿」(夕方になるといつも小倉の山に鳴く鹿), 例(17)「瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして偲はゆ」(瓜を食べると(いつも)子どもらが思い出される。栗を食べるとなおさら偲ばれる)のように, 前件が起こるといつも後件が起こるという関係, 言い換えれば前件と後件との間の必然的な関係を示すものである。

4. 「バ」の上接語による原因・理由的条件

- (18) …天伝入日さしぬれ(刺奴礼) ますらをと思へる我もしきたへの衣の袖は通りて濡れぬ 巻 2 135
 (19) …日月のまねくなりぬれ(数多成塗) そこ故に皇子の宮人行くへ知らずも 巻 2 167
 (20) …ひさかたの天知らしぬれ(所知奴礼) こいまるびひづち泣けどもせむすべもなし 巻 3 475

林巨樹(1959)によると, 原始日本語には文と文との接続に未然形, 連用形, 已然形が用いられており, 接続助詞は存在しなかったという。例えば, (18)「入日さしぬれ」(夕日が落ちて来たので), (19)「日月のまねくなりぬれ」(月日もあまた積もったので), (20)「天知らしぬれ」(天におのほりになったので)は, 「バ」を承接しなくても已然形それ自身の形で原因・理由的条件を表す。

本章で検討する原因・理由的条件の「已然形+バ」は, 林大(1955)に「已然形そのものが確定条件法としての意味を持っており, 「ば」は条件法を明らかにするために, それも「ど」の逆接に

対して順接を示すものとして付加されることになったものである。」とあるように、もともと既定条件（大半が原因・理由的条件）を示していた已然形が順接の既定条件（原因・理由条件）をより明示的にするために「バ」を承接するようになった。つまり、「已然形+バ」はもともとは既定条件のうちの原因・理由的条件を基本としていたものと考えられる。『萬葉集』では「已然形+バ」905例のうち、この原因・理由的条件は313例、34.6%（905例に対する比率）とかなりの高率で出現している。ちなみに萬葉仮名でその内訳を示すと、「者」が218例、「婆」79例、「波」13例、「齒」2例、「薄」1例となっている。

4.1. 「V 已然バ」による原因・理由的条件

(21) なつきにし奈良の都の <u>荒れ行けば</u> （荒行者）出て立つごとに嘆きし増さる	巻 6	1049
(22) この月のここに <u>来れば</u> （来者）今とかも妹が出て立ち待ちつつあるらむ	巻 7	1078
(23) 生ける者遂にも死ぬるものに <u>あれば</u> （有者）この世にある間は楽しくをあらな	巻 3	349
(24) 春霞たなびく山の <u>隔れれば</u> （隔者）妹に逢はずて月そ経にける	巻 8	1464
(25) あらたまの年の <u>経ぬれば</u> （経去者）今しはとゆめよ我が背子我が名告らすな	巻 4	590
(26) 朝参の君が姿を見ず久に <u>鄙にし住めば</u> （比奈尔之須米婆）我恋ひにけり	巻18	4121
(27) しぐれの雨間なくし <u>降れば</u> （無間零者）三笠山木末あまねく色付きにけり	巻 8	1553
(28) 留め得ぬ命し <u>あれば</u> （寿尔之在者）しきたへの家ゆ出でて雲隠りにき	巻 3	461
(29) 草枕旅にし居れば（羈西居者）刈り薦の乱れて妹に恋ひぬ日はなし	巻12	3176
(30) あしひきの <u>山にし居れば</u> （山二四居者）風流なみ我がするわざをとがめたまふな	巻 4	721

原因・理由的条件を表す「已然形+バ」の中では、動詞已然形に接続する「V 已然バ」が207例、66.1%（313例に対する比率）とその大半を占めている。動詞の前に強めの助詞「シ」を付加した「シ V 已然バ」も含めた。

例(21)「荒れ行けば」（荒れて行くので）が動詞の已然形に「バ」を承接した「V 已然バ」形式である。例(26)「鄙にし住めば」（鄙にいましたので）が動詞の前に強めの助詞「シ」を付加した「シ V 已然バ」形式である。例(21)～(25)までが「V 已然バ」形式、例(26)～(30)までが「シ V 已然バ」形式である。前件にある「V 已然バ」「シ V 已然バ」はいずれも後件に対して原因・理由「ノデ・カラ」を意味するものとなっている。

4.2. 「N ナレバ」による原因・理由的条件

(31) 玉ならば手にも巻かむをうつせみの <u>世の人なれば</u> （世人有者）手に巻き難し	巻 4	729
(32) …うつせみの <u>世の人なれば</u> （代人有者）大君の命恐み…	巻 9	1785
(33) うつせみの <u>世の人なれば</u> （世人有者）大君の命恐み…	巻 9	1787
(34) …うつせみの <u>世の人なれば</u> （代人奈礼婆）うきなびき床に臥い伏し…	巻17	3962
(35) …うつせみの <u>世の人なれば</u> （与能比等奈礼婆）たまきはる命も知らず…	巻20	4408

- (36) うつせみの世の事なれば (世之事尔在者) 外に見し山をや今はよすかと思はむ 巻3 482
 (37) 常磐なすかくしもがもと思へども世の事なれば (余能許等奈礼婆) 留みかねつも 巻5 805
 (38) 旅なれば (多婢奈礼婆) 思ひ絶えてもありつれど家にある妹し思ひ悲しも 巻15 3686
 (39) さ額田の野辺の秋萩時なれば (時有者) 今盛りなり折りてかざさむ 巻10 2106
 (40) 春なれば (波流奈例婆) うべも咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに 巻5 831

既定条件の「N ナレバ」は計18例あり、そのうち17例(「者」11例,「婆」6例), 5.4% (313例に対する比率) が原因・理由を意味する。つまり「N ナレバ」は基本的に原因・理由的条件を表すと考えられる。

例(31)(32)(33)(34)(35)「うつせみの世の人なれば」(この世の人ですから), 例(36)(37)「世の事なれば」(世の常なのだから) 等に見るように, 「N なれば」による原因・理由的条件は, 固定化・慣用化された表現が多いようだ。

4.3. 「V タレバ」による原因・理由的条件

- (41) ますらおの高円山に迫めたれば (迫有者) 里に下り来るむざさびそこれ 巻6 1028

「V タレバ」は計2例(いずれも「者」)しかなく, そのうちの1例が上記(41)の原因・理由的条件である。前件「迫めたれば」(追いつめられて)が後件「里に下り来る」(里に下りて来た)の原因・理由を表している。

4.4. 「A ケレバ」による原因・理由的条件

- (42) 若ければ (和可家礼婆) 道行き知らじ賂はせむしたへの使ひ負ひて通らせ 巻5 905
 (43) …言問はむよしのなければ (縁乃無者) 心のみむせつつあるに… 巻4 546
 (44) …使ひなければ (都可比奈家礼婆) 持てれども験をなみとまた置きつるかも 巻15 3627
 (45) 針はあれど妹しなければ (妹之無者) 付けめやと我を悩まし絶ゆる紐の緒 巻12 2982
 (46) …取り与ふる物し無ければ (物之無者) 男じものわき挟み持ち… 巻2 210
 (47) …世の中の常しなければ (都祢之奈家礼婆) うちなびき床に臥い伏し… 巻17 3969
 (48) …己が身し勞しければ (意乃何身志伊多波斯計礼婆) 玉梓の道の隅廻に草手折り… 巻5 886

形容詞の已然形に承接する「A ケレバ」は計11例(「者」6例,「婆」5例)あり, すべてが原因・理由的条件を表す。

例(42)「若ければ」(幼いから), (43)「よしのなければ」(きっかけがないので), (44)「使ひなければ」(使いがないので)は「A ケレバ」形式, 例(45)「妹しなければ」(彼女がないので), (46)「物し無ければ」(物もないので), (47)「常しなければ」(無常な身なので), (48)「己が身し勞しけれ

ば」(自分の身が病気で苦しいので)は強意の助詞「シ」が形容詞に前接する「シ A ケレバ」形式となっている。

4.5. 「V ネバ」による原因・理由的条件

- (49) ぬばたまの夢にはもとな相見れど直にあらねば (多太尔安良祢婆) 恋止まずけり 卷17 3980
 (50) 夢の逢ひは苦しかりけりおどろきて掻き探れども手にも触れねば (不所触者) 卷4 741
 (51) 行く川の過ぎにし人の手折らねば (手不折者) うらぶれ立てり三輪の檜原は 卷7 1119
 (52) ここにありて春日やいづち雨つつみ出てて行かねば (出而不行者) 恋ひつつそ居る 卷8 1570
 (53) あらたまの年反るまで相見ねば (安比見祢婆) 心もしのに思ほゆるかも 卷17 3979
 (54) 味飯を水に醸みなし我が待ちしかひはかつてなし直にしあらねば (直尔之不有者) 卷16 3810
 (55) 三冬継ぎ春は来れど梅の花君にしあらねば (君尔之安良祢婆) 招く人もなし 卷17 3901
 (56) 旅衣八重着重ねて寝ぬれどもなほ肌寒し妹にしあらねば (伊母尔志阿良祢婆) 卷20 4351
 (57) 世の中も常にしあらねば (常尔師不有者) やどにある桜の花の散れるころかも 卷8 1459
 (58) 世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば (鳥尔之安良祢婆) 卷5 893

打消の助動詞「ズ」の已然形「ネ」に「バ」が承接した「ネバ」は基本的に順接の既定条件即ち原因・理由(「～ノデ」)の意味を表す。「ネバ」が動詞に後接した形式を「V ネバ」とし、「者」42例、「婆」10例、「波」3例と計55例、17.6%(313例に対する比率)ある。原因・理由的条件を表すものの中では「V 已然バ」に次いで多い。

例(49)「直にあらねば」(じかではないので)、(50)「手にも触れねば」(あなたが手にも触れないから)、(51)「手折らねば」(手折らってくれないので)、(52)「出てて行かねば」(出て行けないので)、(53)「相見ねば」(逢っていないので)は「V ネバ」形式となっている。(54)「直にしあらねば」(あの本人が来たのではないので)、(55)「君にしあらねば」(君ではないので)、(56)「妹にしあらねば」(妻ではないので)、(57)「常にしあらねば」(不定なものですから)、(58)「鳥にしあらねば」(鳥ではないので)は強意の助詞「シ」が動詞に前接する「シ V ネバ」形式である。特に「シ V ネバ」は用例に見るように「N にしあらねば」という慣用的な表現が多いようだ。

4.6. 「V ネバ」による逆接条件

- (59) 筑紫船いまだも来ねば (未毛不来者) あらかじめ荒ぶる君を見るが悲しき 卷4 556
 (60) 卯の花もいまだ咲かねば (未開者) ほととぎす佐保の山辺に来鳴きとよます 卷8 1477
 (61) 秋田刈る假廬もいまだ壊たねば (未壊者) 雁が音寒し霜も置きぬがに 卷8 1556
 (62) 我がやどの萩の下葉は秋風もいまだ吹かねば (未吹者) かくそもみてる 卷8 1628
 (63) 秋山の木の葉もいまだもみたねば (未赤者) 今朝吹く風は霜も置きぬべく 卷10 2232

(64) 巻向の檜原もいまだ雲居ねば（未雲居者）小松が末ゆ沫雪流る

巻10 2314

打消の助動詞「ズ」の已然形に「バ」のついた「ネバ」はまた逆接の既定条件「ノニ」の意味をも表す。「者」が16例,「婆」が2例,計18例ある。

例(59)「筑紫船いまだも来ねば」(筑紫船がまだ来もしないのに), (60)「卯の花もいまだ咲かねば」(卯の花もまだ咲いていないのに), (61)「秋田刈る假慮もいまだ壊たねば」(稲刈の仮慮もまだ取り壊していないのに), (62)「秋風もいまだ吹かねば」(秋風もまだ吹かないのに), (63)「秋山の木の葉もいまだもみたねば」(秋山の木の葉もまだ紅葉しないのに), (64)「巻向の檜原もいまだ雲居ねば」(巻向の檜原にもまだ雲がかかっていないのに)が示すように,逆接(「ノニ」)を表す「V ネバ」は構文的に「イマダ V ネバ」形式となることが多い。

しかし,逆接条件を表すのは「V ネバ」に限らない。次のように「V 已然バ」で逆接の意味を表すものが「者」2例,「婆」2例と計4例ある。

(65) うちなびく春さり来れば（春去来者）しかすがに天雲霧らひ雪は降りつつ

巻10 1832

(66) 珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば（許芸久礼婆）長浜の浦に月照りにけり

巻17 4029

(67) うぐひすは今は鳴かむと片待てば（可多麻氏婆）霞たなびき月は経につつ

巻17 4030

(68) もみち葉に置く白露の色葉にも出てじと思へば（念者）言の繁けく

巻10 2307

例(65)の前件「春さり来れば」は,本来は順接の既定条件(「ノデ」)に解釈されるべきであろうが,逆接の接続詞「しかすがに」(そうはいうものの)を伴う後件との意味関係によって,「春が来たというのにそれなのに一面に曇って雪が降っている」と逆接に解釈されている。例(66)「朝開きして漕ぎ来れば」も後件「月照りにけり」との意味関係において,「朝早く船を出して漕いで来たのに,長浜の浦では夜になっていて月が照っている」と逆接に解釈される。例(67)の前件「片待てば」も後件の意味関係から「ウグイスが鳴くだろうと待ちかねているのに,ウグイスが鳴かないで霞がたなびき,月日が過ぎて行く」と逆接に近い意味となっている。例(68)「思へば」も同様に後件との意味関係から逆接に解釈される例である。

5. 「バ」の上接語による事実的条件

事実的条件とは,前件で述べられる已然の事実と後件で述べられる已然の事実とを已然形に後接する「バ」で結びつけたものをいう。事実的条件を表す「バ」は511例(「者」393例,「婆」107例,「波」8例,「齒」3例)あり,「已然形+バ」総数905例に対する比率は56.5%と原因・理由的条件や一般条件よりも多い。『萬葉集』では已然形に「バ」を後接するという形式で,前件の事実と後件の事実とを結びつけて述べるが多かったことが実証される。

表3を見ると,事実的条件を表す「已然形+バ」511例のうち,「V 已然バ」は494例(「者」383例,「婆」101例,「波」8例,「齒」3例)あり,96.7%(511に対する比率)の高率を示す。「N

ナレバ」は1例（「者」）のみ，「V タレバ」も1例（「者」）のみ，「ネバ」は8例（「者」6例，「婆」1例，「波」1例），「トイヘバ」は7例（「者」2例，「婆」5例）と出現数が少ない。古代語では「V 已然バ」が事実的条件を表す典型的形式であったこと，「N ナレバ」「V タレバ」「ネバ」「トイヘバ」は未発達であり，殊に事実的条件には殆ど使われていなかったことが実証される。

この事実的条件は前件と後件の意味関係からさらに①時間的狀況・近接的継起②きっかけ③発見④提題に分類される。以下に「バ」の上接語による分類ごとに用例を挙げて検討する。

5.1 「V 已然バ」による事実的条件

5.1.1 「時間的狀況・近接的継起」を表す事実的条件

(69)	高桜の三笠の山に鳴く鳥の <u>止めば</u> （止者）継がる恋もするかも	巻3	373
(70)	君が着る三笠の山に居る雲の <u>立てば</u> （立者）継がる恋もするかも	巻11	2675
(73)	磯の崎漕ぎ廻み行けば（傍手廻行者）近江の海八十の湊に鶴さはに鳴く	巻3	273
(74)	しなが鳥猪名野を <u>来れば</u> （来者）有間山夕霧立ちぬ宿りはなくて	巻7	1140
(75)	熟田津に船乗りせむと月 <u>待てば</u> （待者）潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな	巻1	8

「時間的狀況・近接的継起」を表す「バ」とは，前件である事態が起こると，続いてすぐ後件である事態が起こるという時間的な前後関係・継起関係を表すものである。例えば(69)「鳥の止めば継がる」(鳥の声は泣き止むとすぐ鳴き継がれる)，(70)「雲の立てば継がる」(雲が立つとすぐ湧き出る)は，前件と後件との近接的継起関係を明示的に示すものである。(73)「磯の崎漕ぎ廻み行けば～鶴さはに鳴く」(磯の崎を漕ぎ巡って行くと～白鳥がたくさん鳴いている)も，前件の事態が起こり，次に後件の事態が起こるという時間的に前後の関係を表す。(74)「猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ」(猪名野をやってくると有間山に夕霧が立った)，(75)「月待てば潮もかなひぬ」(月の出を待っていると潮も満ちて来た)もまた，後件に完了の助動詞「ヌ」をとって，前件の事態が完了し，次に後件の事態が完了したという，やはり時間的な前後関係を表す。

「バ」の前件と後件がさらに時間的に近接し，同時に近い関係を表すようになると，次のように「時」に近い意味となる。

(76)	大君の命恐み <u>出て来れば</u> （伊弓久礼婆）我取り付きて言ひし兒なはも	巻20	4358
(77)	焼津辺に我が <u>行きしかば</u> （去鹿齒）駿河なる阿倍の市道に逢ひし兒らはも	巻3	284
(78)	霞立つ野の上の方に行きしかば（行之可波）うぐひす鳴きつ春になるらし	巻8	1443
(79)	君に恋ひしなえうらぶれ我が <u>居れば</u> （吾居者）秋風吹きて月傾きぬ	巻10	2298

例(76)「出て来れば我取り付きて言ひし兒」(出て来た時，私に取りすがって泣きついた娘)，(77)「我が行きしかば～市道に逢ひし兒」(私が行った時に，私道で見かけた娘)，(78)「野の上の方に行きしかばうぐいす鳴きつ」(野の上の方に行ってみたら，うぐいすが鳴いた)，(79)「君に恋ひしなえ

うらぶれ我が居れば～月傾きぬ」(君を恋い慕いうなだれて私がいる間に月が傾いてしまった)は、後件に過去の助動詞「キ」の連体形「シ」や、完了の助動詞「ツ」「ヌ」が来ているもので、前件の事態が生じたその時に或いは前件の事態が起こっている間に後件の事態が完了したことを表している。「V 已然バ」は前件と後件との関係が時間的に非常に近接して来ると、同時に近い関係を表すこともできたのである。以上の已然形に接続する「バ」は、前件と後件とが既に生じた事態について述べるものであった。しかしながら、『萬葉集』には次のように後件に推量形式をとるものがかなりある。

- | | | |
|---|-----|------|
| (80) 夕されば(夕去者) 君来まさむと待ちし夜のなごりそ今も寝ねかてにする | 卷11 | 2588 |
| (81) 霜曇りすとかあるらむひさかたの夜渡る月の見えなく思へば(念者) | 卷7 | 1083 |
| (82) ますらをの鞆取り負ひて出でて行けば(伊田弓伊気婆) 別れを惜しみ嘆きけむ妻 | 卷20 | 4332 |
| (83) うちなびく春来るらし山の際の遠き木末の咲き行く見れば(見者) | 卷8 | 1422 |
| (84) 赤らひく色ぐはし兎をしば見れば(見者) 人妻故に我恋ひぬべし | 卷10 | 1999 |
| (85) 乎久佐男と乎具佐受家男と潮船の並べて見れば(那良敵弓美礼婆) 乎具佐勝ちめり | 卷14 | 3450 |

例(80)「夕されば君来まさむ」(夕方になるとあなたがお見えになるだろう)、例(81)「霜曇りすとかあるらむ～夜渡る月の見えなく思へば」(霜曇りしているのであろうか夜空を渡る月が見えないことを思うと)、(82)「ますらをの～出て行けば別れを惜しみ嘆きけむ妻」(ますらおが出かけた時別れを辛がって嘆いたであろうその妻)と、後件に未来や現在の事柄を推量する助動詞「ム」「ラム」や過去の事実を推量する助動詞「ケム」をとるもの、例(83)「春来るらし山の端の遠き木末の咲き行く見れば」(春が来たらしい。山の端の遠い梢に咲いていくのを見ると)、例(84)「色ぐはし兎をしば見れば人妻故に我恋ひぬべし」(美人の織女星を幾度も見ると人妻と知りつつ私は恋しくなりそうだ)、(85)「乎久佐男と乎具佐受家男と潮船の並べて見れば乎具佐勝ちめり」(乎久佐男と乎具佐受家男とを並べて見ると乎具佐がちと上のようだ)と、後件に推量・推定の助動詞「ラシ」「ベシ」「メリ」をとるもの等が示すように、已然形接続の「バ」の後件に話し手の推量を表すモダリティ形式が現れている。

このような「バ」は既定条件というよりも仮定条件に近いものを包含している。前稿において仮定条件を表す「未然形+バ」は後件に推量・願望(「ム」「ベシ」)等のモダリティ形式をとる比率が高いことを述べた。後件に「ム」「ラシ」「ベシ」のようなモダリティ形式をとる「已然形+バ」がかなりあるという事実は、古代語において既定条件を表す「已然形+バ」が仮定条件への移行を示す萌芽ともなるべきものを既に内包していたことが示唆される。

ちなみに、本来は既定条件を表していた「已然形+バ」が仮定条件として一般化されるようになるのは近世に入ってからである(湯沢1936 小林1996参照)。

5.1.2 「きっかけ」を表す事実的条件

(86)	ひとり居て恋ふれば(恋者) 苦し玉だすきかけず忘れむ事計りもが	巻12	2898
(87)	佐保川にさをどる千鳥くたちて汝が声聞けば(聞者) 寝ねかてなくに	巻 7	1124
(88)	石走る滝もとどろに鳴く蟬の声をし聞けば(伎気婆) 都し思ほゆ	巻15	3617
(89)	我のみに聞けば(聞婆) さぶしもほととぎす丹生の山辺にい行き鳴かにも	巻19	4178
(90)	ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば(見者) 悲しさ	巻 6	982
(91)	神さぶる岩根こごしきみ吉野の水分山を見れば(見者) 悲しも	巻 7	1130
(92)	もみち葉の散り行くなへに玉梓の使ひを見れば(見者) 逢ひし日思ほゆ	巻 2	209
(93)	国々の防人集ひ船乗りて別るを見れば(美礼婆) いともすべなし	巻20	4381
(94)	霞立つ春の初めを今日のごと見むと思へば(於毛倍婆) 楽しとそ思ふ	巻20	4300

「きっかけ」を表す事実的条件とは、例(86)「恋ふれば苦し」(恋い慕うと苦しい)、(87)「聞けば寝ねかてなくに」(聞くと寝られない)のように、前件の事態がきっかけとなって後件が生じるものをいう。

「きっかけ」を表す前件の動詞は例(87)(88)(89)のように「聞けば」、例(90)(91)(92)(93)のように「見れば」、例(94)のように「思へば」と、「聞く」「見る」「思う」のような感覚・思考を表す動詞が多い。後件の述語は例(90)(91)のように「悲し」、例(89)のように「さぶし」、例(94)のように「楽し」、例(86)の「苦し」のような感情を表す形容詞や例(88)(92)のように「思ほゆ」(偲ばれる)のような自発を表す表現、また例(87)(93)「寝ねかてなくに」(寝られない)、「いともすべなし」(何ともするすべもなく悲しくてならない)のような状態性述語が多いようだ。

以上から、「きっかけ」を表す事実的条件表現の多くは、前件に感覚・思考動詞をとり、後件に感情形容詞・自発動詞・状態性述語等の非動作性述語をとるという構文的特徴を有することがわかる。

5.1.3 「発見」を表す事実的条件

「発見」を表す事実的条件表現とは、例(95)「見渡せば淡路の島に鶴渡る見ゆ」(見渡すと淡路島をさして鶴が飛んで行くのが見える)のように、前件の事態が起こった後、後件の事態を発見するものをいう。

(95)	難波潟潮干に立ちて見渡せば(見渡者) 淡路の島に鶴渡る見ゆ	巻 7	1160
(96)	磯に立ち沖辺を見れば(見者) 海布刈り舟海人漕ぎ出らし鴨翔る見ゆ	巻 7	1227
(97)	紀伊の国の雑賀の浦に出て見れば(出見者) 海人の灯火波の間ゆ見ゆ	巻 7	1194
(98)	天離る鄙の長道を恋ひ来れば(孤悲久礼婆) 明石の門より家のあたり見ゆ	巻15	3608
(99)	我妹子に恋ひすべながり胸を熱み朝戸開くれば(開者) 見ゆる霧かも	巻12	3034
(100)	四極山うち越え見れば(打越見者) 笠縫の島漕ぎ隠る棚なし小船	巻 3	272

例(95)「見渡せば」, (96)「見れば」, (97)「出て見れば」, (100)「うち越え見れば」に示されるように、前件の述語は「見る」類の知覚動詞或いは知覚を表す補助動詞、後件は例(95) (96) (97) (98) (99)「見ゆ」(見える)と発見を明示的に表す知覚動詞となっている。つまり「発見」を表す「バ」は構文的には「見レバ～見ユ」形式を典型とする。

後件の述語に「見ユ」が来れば、前件の述語が例(98)「恋ひ来れば」(恋しく思いながらやって来ると), (99)「開くれば」(開けると)のような動作性述語であっても「発見」を含意する条件文となる。また、例(100)のように後件の文末にある「小舟」の下に「見ゆ」が省略されていると解釈できるものも「発見」を含意する条件文となる。とすると、「発見」を表す「バ」は前件には動作性述語、その多くは「見る」類の知覚動詞や知覚を表す補助動詞であり、後件には「見ゆ」という知覚を表す状態性述語を取るという構文を典型とするといえる。

(101)	川の瀬の激ちを見れば (見者) 玉かも散り乱れたる川の常かも	巻 9	1685
(102)	天の原振り放け見れば (振離見者) 白真弓張りてかけたり夜道は良けむ	巻 3	289
(103)	見渡せば (見和多世婆) 向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻	巻20	4397
(104)	東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば (反見為者) 月傾きぬ	巻 1	48

例(101)「川の瀬の激ちを見れば」(川の瀬のたぎり落ちているのを見ると)、例(102)「振り放け見れば」(大空をふり仰いで見ると)と、前件は「見る」類の知覚動詞或いは知覚を表す補助動詞であり、後件は「白真弓張りてかけたり」(弓張月が空にかかっている), 「玉かも散り乱れたる」(玉でも散り乱れている)と、存続の助動詞「タリ」をとって動作の完了後の状態を表す表現である。構文的に「見レバ～タリ」形式で、前件の事態が起こったあと、後件の動作が起こったあとの状態を発見するという意味を表している。

(103)「見渡せば」(見渡すと), (104)「かへり見すれば」(振り返って見ると)も、前件の述語は「見る」類の知覚動詞または知覚を表す補助動詞、後件は「立てるは愛しき誰が妻」(立っているのは誰の妻であろうか), 「月傾きぬ」(月が傾いている)と動作が完了した後の状態を表す、一種の状態性述語である。構文的には「見レバ～状態性述語」という形式で、前件の動作が起こった後、後件の状態を発見したという意味を表す。

(105)	雪見れば (見雪者) いまだ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ	巻10	1862
(106)	月数めば (都奇余米婆) いまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか	巻20	4492
(107)	見渡せば (視渡者) 近き里廻をたもとほり今そ我が来る領巾振りし野に	巻 7	1243

(105)「雪見ればいまだ冬なり」は「雪を見るとまだ冬である」ことに気づいたということを表す。
 (106)「月数めばいまだ冬なり」もまた「月を数えるとまだ冬である」ことを認識したという意味であり、(107)「見渡せば近き里廻」も「見渡すとすぐそばの里だ」ということを発見したことを意味する、

「発見」を表す条件文である。構文的に「見レバ〜N ナリ」という形式で、前件の事態が行われた後に後件の状態を発見するものである。こうして発見を含意する条件文は前件の述語に「見る」類の知覚動詞が来ることが多いが、次の例のようなものも「発見」を表す条件文となる。

- (108) 我妹子に我が恋ひ行けば (吾恋行者) ともしくも並び居るかも妹と背の山 卷7 1210
 (109) 針袋取り上げ前に置き反さへば (可辺佐倍波) おのともおのや裏も継ぎたり 卷18 4129

例(108)(109)の前件の述語は「恋ひ行けば」(恋しく思いながら行くと)、「反さへば」(裏返して見ると)というような動作性述語である。後件は(108)「並び居る」(並んでいる)。(109)「裏も継ぎたり」(裏までも付いている)と動作が完了した後の状態を表す、一種の状態性述語となっている。これらも前件の事態が行われた後に、後件の状態を発見する条件文である

以上を見てくると、「発見」を表す「バ」の構文的特徴は、前件に動作性述語、その多くが「見る」類の知覚動詞または知覚を表す補助動詞をとり、後件に「見ゆ」(見える)、「〜タリ」(〜テイル)等を典型とする状態性述語が来る。

5.2 「N ナレバ」による事実的条件

- (110) 旅なれば (客在者) 夜中にわきて照る月の高島山に隠らく惜しも 卷9 1691

「N ナレバ」は18例中1例が事実的条件を表す。例(110)の前件「旅なれば」(旅にあると)は既然の事実を表す。後件の「夜中にわきて照る月の高島山に隠らく」(夜中にことに照りまさる月が高島山に隠れる)も既然の事実を表す。前件と後件の既然の事実を「バ」で結んだものである。

なお、日本古典文学大系『萬葉集』の校注はこの「旅なれば」を「旅路にいるので」と原因・理由的条件としている。この解釈に従うと、「N ナレバ」は総数18例全てが原因・理由を表す条件となる。

5.3 「V タレバ」による事実的条件

- (111) 玉だすきかけねば苦しかけたれば (懸垂者) 継ぎて身まくの欲しき君かも 卷12 2992

「V タレバ」は既定条件2例のうちの1例が事実的条件を表す。例(111)は「かけたれば」(口にすれば)と前件の既然の事実を条件に、後件「継ぎて身まくの欲しき君かも」(続けてお逢いたくなるあのお方)が成立するものである。これは後件に願望の助動詞「マク(ノ)ホシ」というモダリティ形式をとっており、仮定条件の萌芽を思わせる表現である。

5.4 「ネバ」による事実的条件

- (112) …眠の寝かてねば (寝乃不勝宿者) 滝の上の浅野の雉明けぬとし立ち騒くらし 卷3 388

⑪ 天雲に近く走りて鳴る神の見れば恐し見ねば（不見者）悲しも

巻7 1369

「ネバ」はその多くが「ノデ」「ノニ」の意味を表す既定条件であるが、僅か8例ではあるが事実的条件を表すものがある。例⑪の「玉だすきかけねば」（口にしなければ）もそれである。例⑫「眠の寝かてねば」（眠れずにいると）、⑬「見ねば」（見なければ）という前件の事実を条件に、後件「～雉明けぬと立ち騒ぐらし」（雉が夜が明けたと立ち騒いでいるようだ）、「悲しも」（悲しい）が成り立つものである。⑫は「時間的継起関係」を意味し、⑬は「きっかけ」を表すものである。

5.5 「トイヘバ」による提題的条件

⑭ 恋と言へば（恋云者）薄きことなり然れども我は忘れじ恋ひは死ぬとも 巻12 2939

⑮ 旅といへば（多婢等伊倍婆）言にそ易き少なくとも妹に恋ひつつすべなけなくに 巻15 3743

⑯ 神木にも手は触るといふをうったへに人妻といへば（人妻跡云者）触れぬものかも

巻4 517

⑰ 能登川の後には逢はむしましくも別るといへば（別等伊倍婆）悲しくもあるか 巻19 4279

「～トイヘバ」は、「～」の部分に当たる題目や話題について説明する、いわゆる提題を表す条件形式をいう。

例⑭「恋と言へば」（恋について言へば）は、「恋」という題目を提示し、それについて「薄きことなり」（それだけのこと）と説明している。⑮「旅といへば」、⑯「人妻といへば」も同様、「旅」「人妻」を題目として提示し、それについて「言にそ易き」（言葉の上ではそれだけのこと）、「触れぬものかも」（触れてはならないものなのだろうか）と述べている。「トイヘバ」はこのように文の主題を提示する、いわゆる提題的な条件形式として用いられている。例⑰「別るといへば」は、岩波古典文学大系『萬葉集』の校注に「別れるということとは」とあるように、「トイヘバ」で文の主題が明示され、それについて「悲しくもあるか」（悲しいことです）と説明をするものとなっている。この「已然形+バ」は今まで見て来たような前件が条件として後件に関係づけられる条件接続用法ではない。前件と後件の意味関係において条件を表さないものとして、中島（1998）が提起した非条件接続用法に属するものである。

6. おわりに

『萬葉集』において「已然形+バ」905例は、事実的条件に511例、原因・理由的条件に313例、一般条件に81例ある。その大部分が「V 已然バ」形式で、事実的条件511例中494例、原因・理由的条件313例中211例、一般条件81例中81例と多用されている。言い換えれば、「V 已然バ」が事実的条件、原因・理由的条件、一般条件を表す典型的な形式であったことがわかる。「N ナレバ」は18例のうち17例、「A ケレバ」は11例すべて、「ネバ」はその大半が原因・理由的条件に用いられているところから、基本的に原因・理由を表すには「N ナレバ」「A ケレバ」「ネバ」形式を用いた

こと、「V タレバ」は2例しかなく、「V ナレバ」は1例もないことから、「V タレバ」「V ナレバ」は未発達であったこと等が実証される。また、「トイヘバ」が主題を提示する提題的用法に使われていることから、「バ」の条件接続用法から非条件接続用法への広がりをも指摘できる。

引用・参考文献

- 小島憲之・木下正俊・佐竹昭広 1963 補訂版『萬葉集』本文篇 塙書房
 小島憲之・木下正俊・東野治之 1996 『萬葉集』新編日本古典文学全集 小学館
 正宗敦夫編 2003 『萬葉集索引』古典索引刊行会編 塙書房
 高木市之助・五味智英・大野晋 1959 『萬葉集』日本古典文学大系 岩波書店
 小林賢次 1996 『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
 小路一光 1988 『萬葉集助詞の研究』笠間書院
 阪倉篤義 1958 「条件表現の変遷」『文章と表現』角川書店
 1993 『日本語表現の流れ』岩波セミナーブックス45 岩波書店
 奥津敬一郎・中島悦子 1989 「『捷解新語』の条件表現(一)「ナラバ」—初刊本・改修本・重刊本を比較して—」『国文目白』29号 日本女子大学国語国文学会
 1990a 「『捷解新語』の条件表現(二)—初刊本・改修本・重刊本を比較して—」『国文目白』30号 日本女子大学国語国文学会
 1990b 「『捷解新語』の条件表現(三)—初刊本・改修本・重刊本を比較して—」『日本女子大学紀要』40号
 中島悦子 1989 「『平家物語』の「ならば」—覚一本と天草本を比較して—」『会誌』8号 日本女子大学大学院の会
 1990a 「『平家物語』における「たらば」と「たならば」—覚一本と天草本を比較して—」『東海大学留学生教育センター紀要』10号
 1990b 「『浮世床』の条件表現—「ナラバ」と「ナラ」、「タラバ」と「タラ」—」『会誌』9号 日本女子大学大学院の会
 1997 「自然談話に現れる「と」「ば」「たら」「なら」—非条件接続用法を中心に—」『ことば』18号 現代日本語研究会
 1999 「条件接続用法における「と」「ば」「たら」「なら」の使い分け—書きことばと話しことばの実態調査から—」『国士館短期大学紀要』24号 国士館短期大学人文学会
 2004 「古代語の条件表現(1)假定条件「未然形+ば」—『萬葉集』を資料として—」『21世紀アジア学部紀要』第3号 国士館大学21世紀アジア学会
 蜂谷清人 1977 「狂言古本における假定条件表現「ならば」「たらば」とその周辺」『成蹊国文』10号
 林 大 1955 「萬葉集の助詞」『萬葉集大成6 言語篇』平凡社
 林巨樹 1959 「ば・とも・との研究」『国文学 解釈と教材の研究』
 松下大三郎 1928 『改選標準日本文法』紀元社。訂正版(1930) 中文館。復刊(1970) 勉誠社。
 山口堯二 1980 『古代接続法の研究』明治書院
 山田孝雄 1908 『日本文法論』宝文館
 1913 『奈良朝文法史』宝文館
 湯澤幸吉郎 1936 『徳川時代言語の研究』刀江書店
 1940 「接続助詞『ば』の用法」『国語学論考』八雲書林
 渡辺 実 1974 『国語構文論』塙書房